

万年筆の旅

Vol. 22



巻頭コラム

「歴史小説を書くきっかけとなった土地・長崎」 中島恵美子

CONTENTS



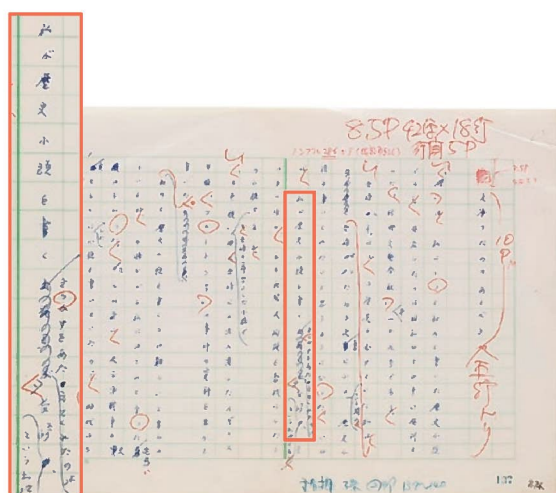
- 令和5年度第1回企画展開催報告
- おしどり文学館協定
- 第23回トピック展示
- 第24回トピック展示第24回
- 私の推し！

「長崎と私～吉村昭 百七回の探訪～」
荒川区・福井県合同展示開催報告
「津村節子「白百合の崖」—山川登美子の人生と歌—」
「吉村昭とボクシング」
「私の好きな吉村昭作品」結果発表報告

巻頭コラム「歴史小説を書くきっかけとなった土地・長崎」中島恵美子

長崎を舞台とする吉村昭作品には『戦艦武蔵』『ふぉん・しいほるとの娘』『暁の旅人』『海の祭礼』等の名作がある。『七十五度目の長崎行き』『わたしの普段着』等の珠玉のエッセーにも長崎が登場する。吉村先生は取材や調査で百七回来崎し、百回目には県知事から「長崎奉行」に任命された。

文庫版『礫』の「文庫のためのあとがき」には「私が歴史小説を書くきっかけをあたえてくれたのは長崎という土地」という文言がある。この直筆原稿を、妻の津村節子先生が県立長崎図書館に寄贈された。

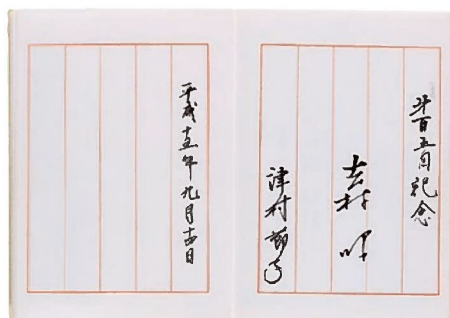


自筆原稿「文庫のためのあとがき」
長崎県立長崎図書館蔵

私は平成二十年四月から四年間、県立長崎図書館で「長崎ゆかりの文学」を担当し、津村先生とのご縁を頂いた。津村先生を通して、吉村先生と長崎との絆をより深く知ることとなった。吉村先生のご生前、津村先生は「吉村が蒸発したら、行き先は長崎にちがいない。」と思っておられたそう。吉村先生が津村先生を残して蒸発なさるはずもないが、それくらい長崎が大好きだった。津村先生の「長崎図書館に吉村昭原稿を」との想いから、「ロシア皇太子の刺青」「暁の旅人」の直筆原稿も寄贈いただいた。

世界遺産の三菱重工長崎造船所史料館には、吉村先生の遺品を展示した「吉村昭コーナー」がある。その除幕式に津村先生が出席された。奇しくも平成二十三年三月十一日、東日本大震災の日であった。

昨年十二月、吉村昭記念文学館の企画展「長崎と私」吉村昭 百七回



長崎県立長崎図書館「芳名録」
長崎県立長崎図書館蔵
平成15年来崎百五回記念の際。



中島恵美子編著『長崎游学14 長崎文学散歩』
(令和元年 長崎文献社)
4頁にわたり吉村昭を紹介。

の探訪」を見学した。県立長崎図書館へ寄贈された三編の直筆原稿も里帰りした。百七回の長崎訪問における綿密な調査・取材、長崎の人々との親交等、長崎は吉村先生ご夫妻にこんなにも愛されているのだと胸が熱くなった。

津村先生は、拙著『長崎游学14 長崎文学散歩』に「長崎抒情」という玉稿を寄せてくださった。吉村先生と長崎との出会い、なぜ長崎へのめぐりこんでいかれたか、長崎での吉村先生との思い出等が、洗練された温かい文章で記されている。百七回の半分以上を津村先生も同行されたのである。

シーボルトの娘で日本初の女性産科医となったお稲、オランダ人医師ボン

べから西洋医学を学んだ松本良順、日本最初の英語教師ラナウド・マクドナルド、処刑された二十六聖人、そして、戦艦「武蔵」。長崎は、吉村先生の歴史小説出発の土地であるとともに、吉村先生によって名作の舞台となった。長崎に生まれ育った者として感謝の念に堪えない。

Profile



中島恵美子 (なかしま えみこ)

長崎県立長崎図書館指導主事(再任用)。長崎国際大学非常勤講師。長崎県生まれ。長崎大学卒業。成城大学大学院博士課程後期満期退学。専門は万葉集。長崎県立高校国語教師、県教育センター指導主事、県立図書館指導主事、県立学校教頭等を務め定年退職。著書『長崎游学14 長崎文学散歩～作家たちに愛された長崎を歩く～』(長崎文献社)

『長崎と私〜吉村昭 百七回の探訪〜』

会期…令和5年11月1日(水)〜

12月24日(日)

『長崎は、私の好きな町である』*

とエッセイに記す吉村にとって、長崎は忘れがたく魅了された町のひとつで、生涯を通して百七回訪問しました。

今回の企画展では、小説家として大きく飛躍するきっかけとなった「戦艦武蔵」の舞台地である長崎に焦点を合わせ、長崎に関連する歴史小説を中心に取り上げました。あわせて、吉村が愛した長崎の風情やゆかりの場所などを紹介しました。



企画展展示室入口

長崎の伝統的なお菓子・カステラの色合いをイメージした。



「武蔵」進水支綱切断の斧と支え台一式

進水式の使用された斧と台。台には、切断した際の斧の跡が残っている。(三菱重工長崎造船所史料館蔵)

「第1章」では、吉村と長崎の出発点となった「戦艦武蔵」に注目しました。

昭和41年3月、「武蔵」の取材のため、吉村は初めて三菱重工長崎造船所を訪れました。関係者と会い、話を聞いて書き上げた「戦艦武蔵」は同年、「新潮」9月号に一挙掲載され、その後ベストセラーとなりました。今回の展示では、三菱重工長崎造船所史料館から、「武蔵」進水式で使用した支綱切断の斧と台をはじめ、多くの資料や写真データをご提供いただきました。

「第2章」では、長崎を舞台とした歴史小説を取り上げました。ギリシタン殉教を描いた「磔」、明治に起きた大津事件を題材にした「ニコライ遭難」、幕末・動乱の時代を生きた松本良順の姿を描いた「暁の旅人」などを取り上げました。長崎県立長崎図書館からはこれらの作品に関する、吉村の自筆原稿をお借りしました。

昨年、長崎ではシーボルト来日200周年を記念したさまざまなイベントが開催されました。当展示でも「ふおん・しいほるとの娘」を大きく取り上げました。シーボルト記念館からは「シーボルト妻子像螺鈿合子」(複製)や、シーボルトの娘楠本稲の家族写真など、貴重な資料をお借りしました。今回、新聞連載掲載時に描かれた、三井永一氏の挿絵の原画等を取り上げることができ、じつに貴重な機会となりました。

そして「第3章」では、吉村と津村が愛した「思い出の長崎」と題し、長崎ゆかりの資料を展示しました。長崎県から贈られた「長崎奉行」の陶板と任命書、吉村が心より楽しんだ「長崎くんち」の祭り、長崎の味「福壽」に贈られた吉村の自筆原稿、長崎を訪れた際に足繁く出向いた「マツヤ万年筆病院」、酔いしれた「はくしか」の味と人情を紹介しました。

また長崎文化放送ご協力のもと、長崎くんちについてより理解いただける

よう編集された「長崎くんち紹介ビデオ」を展示期間中放映しました。



吉村が長崎くんち祭礼の時に受け取った手ぬぐいと扇子
津村節子氏寄託資料

展示を鑑賞いただいた方からは、「長崎を舞台とした小説の直筆原稿、挿絵を見ることができて楽しかった」、「他資料館からの貴重な資料を展示していただき、見応えがあった」、「ビデオ放映、支綱切断一式の展示などとても興味深かった」などの感想をいただきました。

奥深い歴史と高い文化をもち、篤い人情と美味な食物にあふれた長崎という町に、魅せられ続けた吉村の長崎愛を堪能していただけたのではないのでしょうか。

*『フスの名産後援 かつし全開 2』(七十五年度)の長崎行き平成21年河出書房新社

企画展関連イベント

講演会

「吉村昭の『律儀』と長崎」を深掘りする
くお世話になった長崎の一人として」

講師：本馬貞夫氏

(長崎県立長崎学アドバイザー)

日時：11月19日(日) 14時～15時

長崎県立長崎図書館において副館長
兼郷土課長を務め、吉村と親交のあつ
た本馬貞夫氏をお招きし、ご講演いた
だきました。



本馬貞夫氏

歴史学が専門の本馬氏は、まず吉村
が調査の拠点とした県立長崎図書館の
歴史について語りました。集まった人
材と資料、これが図書館の大きな財産
であり、吉村が調査の拠点とした所以
であると話されました。

次に、吉村と長崎で交流のあった
方々のエピソードや思い出を、ユーモ
アを交えてご紹介くださいました。直
接吉村と面識のあった氏のお話はどれ
も得難いものばかりで、来場の方から
は「生前の吉村さんとの関わりが生き
生きと伝わってくる講演だった」、「(本
馬氏の)吉村先生への思いが伝わって
きた」といった声が届きました。

本馬氏は、長崎の伝統的な祭礼であ
る「長崎くんち」の解説を長年務めてお
られます。昨年は、コロナ禍後4年ぶ
りに「長崎くんち」が開催されました。
くんちの会場で撒かれた「まきもの」の
手ぬぐいを、講演会会場でも同様に、
観客席に向って撒いてくださいました。
こうした長崎の歴史や文化に触れるこ
とができ、「とても勉強になった」、「長
崎が近く感じられるような気分になっ
た」、「長崎に行ってみたと思った」な
どの感想が寄せられました。



縁起物とされるまきものの手ぬぐいを観客席に向って撒く本馬氏。

ワークショップ

「シーボルトが長崎にやって来た！
変わる江戸・日本の科学」

日時：11月18日(土) 14時～15時

企画展に合わせて、シーボルトを特
集したワークショップを開催しまし
た。シーボルトの学術研究分野であつ
た医学や植物学・社会・美術などを組
み合わせたスライドを見ながら、江戸
時代後半の、激動の時代を学びました。
江戸風遠眼鏡(望遠鏡)を組み立てて、
最後に企画展の見学を行いました。

参加した小学生の親子は、文学館を
初めて訪れたということで、長崎くん
ちの資料などを興味深そうにご覧に
なっていました。

スタンプラリー

「つなげてみよう」

「長崎⇄吉村昭⇄ゆいの森」

期間：11月7日(火)～12月7日(木)

ゆいの森あらかわ施設内3ヶ所に設
置されたスタンプを集めるスタンプラ
リーを実施しました。スタンプを集め
た方には景品をプレゼントし、好評に
より予定より早く景品終了となりました。

長崎を身近に感じていただくとう台
紙のスタンプカードは、「文学館」「ゆい
の森あらかわ」「長崎」を路面電車でつ
なげました。かわいい絵柄のスタンプ
を押すため、これまで文学館に足を踏
み入れたことのない幼児の親子連れ
が、一緒にスタンプを押す姿もたびた
び見られました。(学芸員 篠田敦子)

スタンプラリーで使用了 スタンプカード

吉村を中心に、荒川と長崎を
路面電車で結んだ台紙。



津村節子「白百合の崖」——山川登美子の人生と歌——

会期…令和5年10月20日(金)～

令和6年1月17日(水)

文壇のおしどり夫婦と呼ばれた吉村昭氏と津村節子氏にちなみ、平成29年11月5日に、吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館は、おしどり文学館協定を締結しました。この協定に基づき、文学館同士の連携事業を行っています。

今回の展示では、津村の「白百合の崖」を取り上げました。この作品は、豊かな才能を持ちながらも、29歳でこの世を去った福井県出身の歌人・山川登美子の生涯を描いた評伝小説です。展示では福井県ふるさと文学館から自筆原稿(複製)、取材写真、登美子の生家であった山川登美子記念館から登美子関連写真、登美子の母校日本女子大学の図書館・成瀬記念館から雑誌「明星」・詩歌集「恋衣」などをお借りし、調査資料を含む21点を紹介しました。

登美子は、明治12年(1879)に現在の小浜市で生まれました。出身地である福井の女性について、雪が降り積もる長い冬、「雪の重みで地に届くかと思うほどしなつた柳が雪を払ってはね返るような強さを見せることがある」※1と述べる津村は、登美子の歌にも「内に秘めた烈しさ」※1を感じ惹かれました。

また、小説家を目指して同人雑誌に参加していた経験が、与謝野晶子をはじめとした「明星」の仲間たちと青春を燃焼した登美子に重なる思いもありました。

郷里の秀れた歌人を知ってもらいたいという気持ちと共に、「小説の主人公は自分の感情移入出来る人物でなくては書けない」※2との思いから、冬の長い北陸の気候、風土、環境の中で育った登美子を小説の主人公に選びます。執筆にあたっては福井をはじめ、京都や滋賀などゆかりの地を訪ね取材・調査を重ねました。

あまり日記を遺さなかった登美子の心情を、津村は歌から捉えることを主としながらも、歌を作らなかつた時代も小説を面白くするための虚構にならないように心を配りました。鉄幹への思い、諦めきれない歌への未練、刻々と迫る死の恐怖を詠んだ登美子の歌の数々に胸を締め付けられながら書き上げた作品は、「白百合の崖」として「新潮」(昭和58年12月)に一挙掲載されました。

(学芸員 北山ゆかり)



展示風景

学芸員ノート9



丹阿弥波子「美」(メソチント 紙 1982年)
写真提供 神奈川県立近代美術館



津村節子
「白百合の崖」
(昭和58年 新潮社)※3

単行本『白百合の崖』の表紙には、丹阿弥波子氏の銅板画「美」の一部が使用されています。丹阿弥氏はメソチントという銅版画の技法で、野に咲く草花をはじめ、身近にあるものをモチーフにした繊細な作品を数多く発表しています。

福井県ふるさと文学館特集展示

福井県ふるさと文学館では、「津村節子と吉村昭」歌人・俳人を描いて〜(令和5年9月29日〜12月20日)を開催しました。

津村節子は『白百合の崖』を、吉村昭は福井ともゆかりのある俳人・尾崎放哉を描いた小説『海も暮れきる』を発表しています。また、親しい編集者を交え夫婦で、「石の会」という句会を始め、俳句に向き合いました。展示では、歌人・俳人を描いた小説や、夫婦の句作について紹介しました。

おしどり協定記念グッズをプレゼントしました

展示期間中に開催した企画展「長崎と私の関連イベント・本馬貞夫氏講演会「吉村昭の「律儀」と長崎」を深掘りするお世話になった長崎の一人として」(詳細P4)で、おしどり協定記念グッズをプレゼントしました。ポストカードには山川登美子の歌「髪ながき少女とうまれしる百合に額は伏せつつ君をこそ思へ」を記載しました。



(上) 越前和紙製山川登美子
ポストカードと紙ファイル
(吉村昭記念文学館)
(下) おしどりコースター
(福井県ふるさと文学館)

※1「若狭の登美子」(『花時計』平成10年 読売新聞社) ※2「登美子と晶子」(『桜道路』平成20年 河出書房新社) ※3 版元品切れ、電子版配信中

吉村昭とボクシング



会期：令和6年1月19日(金)～

4月17日(水)

吉村昭が初めて芥川賞候補に選ばれたのは、ひとりのボクサーの死をめぐる「鉄橋」(文学者「昭和33年7月」という作品でした。この他にボクサーを描いた小説は「孤独な噴水」(昭和39年講談社)「十点鐘」(農業北海道「昭和47年8月 北海道新聞社」)があります。本展では芥川賞候補として「鉄橋」が転載された「文藝春秋」(昭和34年3月 文藝春秋新社)をはじめとして、「十点鐘」の自筆原稿(複製)や、書斎で保管していたボクシング関係の雑誌等を紹介しました。

ボクシングとの出会い

吉村はアメリカの作家ヘミングウェイの作品を愛読していました。特に好きだったのは、落ちぶれたボクサーの登場する「拳闘家」と、八百長試合に関わるボクサーを描いた「五万ドル」です。自身でもボクサーの小説を書いてみたいと考えており、「拳闘家」に触発されて「鉄橋」を執筆しました。こうしてヘミングウェイをきっかけにボクシングに関心を持ち、雑誌に出ている名勝負はほとんど見ていると自負するほど、ボクシングに熱を入れるようになります。暖房のない冬の試合で、選手

の肌が紅潮し体から湯気が立ち昇る姿や、戦っている姿などに美しさを見出していました。

「孤独な噴水」は吉村にとって初めての長篇小説です。講談社の編集者から「鉄橋」と同じようにボクサーを主人公にした小説を執筆してほしいという依頼を受け、毎晩のように都内のボクシングジムを歩きまわり取材を行って描きました。「鉄橋」をきっかけにボクシング関係者と繋がりを持ち、試合も頻りに観戦していたこともあり、執筆は順調で、かなりの手応えを感じていました。

荒川区と白井義男

「十点鐘」は引退したボクサーのその後の人生を追っていく小説です。「孤独な噴水」と「十点鐘」は吉村の生まれた荒川区が舞台となっています。荒川区は、日本で初めてプロボクシングの世界チャンピオンとなった白井義男(1923～2003)が生まれた、ボクシングにゆかりのある地でもあります。白井は、GHQ[※]勤務のアルビン・R・カーン博士に見出され、ボクサーとしての頭角を現していききました。そして昭和27年(1952)5月19日、世界フライ級タイトルマッチでアメリカのダド・マリノを破り、日本

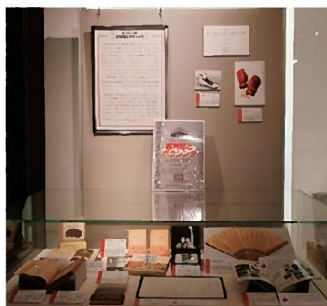
人として初の世界チャンピオンの座を勝ち取ることとなります。

生誕100年を記念し、首藤正徳氏と津江章二氏の協力により、白井が現役時代に、数々のボクサーから集めたサインの入った扇子と、白井が世界チャンピオンになった試合でカーン博士が身に着けた関係者用バッジを展示しました。併せて、文学館のエントランスでは、白井の私服姿や練習風景の写真などをパネル展示し、入口には西泰生氏の協力により、白井の等身大パネルを設置しました。

本展を機に、ボクシングファンの方にも、吉村作品に触れていただけたら幸いです。(学芸員 宮澤涼子)



白井義男(右)とカーン博士(左)
写真提供：日刊スポーツ



展示風景



文学館エントランスの展示風景



白井義男の等身大パネル

これは「孤独な噴水」が発表された当時、書評と共に「週刊現代」(昭和39年11月5日 講談社)に掲載されたインタビュの一部です。トピック展のチラシにも使用したこのインタビューでは、「孤独な噴水」は全くのフィクションであること、アメリカ文学の手法で描いて生きる日本の材料はボクシングに限られるということ、そしてボクサーの魅力等について語っています。

当時はボクサーの生き様に憧れていた吉村でしたが、のちに世界選手権戦において、日本人に有利な判定が下されるのを何度も見ることで、ボクシングからは離れていったのです。

「プロボクサーの生命は、非常に短いものです。一生を、一瞬のうちに、完全燃焼させて生き、それで終るんですね。そのイサギよい瞬間的な人生、といったものに私は限らない魅力をおぼえます。私自身の人生も、そうありたいという憧憬としての魅力をです」



第24回トピック展示チラシ

※戦後日本に設置された連合国軍最高司令官の総司令部

私の推し!

「私の好きな吉村昭作品」

令和5年(2023)11月1日~12月28日まで募集した「私の好きな吉村昭作品」は94通のご応募がありました。たくさんのご応募ありがとうございました! いただいたコメントの一部をご紹介します。※掲載にあたり、コメントを整えたものがあります。ご了承ください。

「赤い人」

北海道出身です。たくさん北海道の事を書いてくれて、うれしいです。

「海の祭礼」

私の住む尻尻島が舞台になっているから。島人としてとても誇りに思っています。

「海の史劇」

バルチック艦隊が、長い距離をはるばるやってくる経緯がとても細かくえがかれていて、読んでいて自然と頭の中に光景が浮かんでくるから。

「海も喜れる」

吉村昭を読むきっかけとなった本です。俳人・尾崎放哉の最期の日々が壮絶に描かれて胸を打たれます。

「梅の蕾」

思わず涙しました。心あたまるお話。

「鯨の絵巻」

長男が生れた日、病院の売店で求め、この作品を読みながら誕生を待ちました。これが吉村作品との出会いとなりました。

7通!

「熊風」

熊のおそろしさが、いやがおうにも伝わってくる。「ジリ」も怖ろしいが、熊も負けてない。

4通!

「高熱隧道」

この本が一番です。

3通!

「桜田門外ノ変」

歴史を深く考察し読みごたえの有る本です。

「少女架刑」

初期の作品の中でも最も独特の吉村ワールドを存分に堪能できる。何と言っても主人公が亡くなった少女というのがポイント。是非多くの人に読んでほしい大傑作!!

3通!

「戦艦武蔵」

建造過程だけではなく、それぞれの思惑や船内という密室空間での人間模様など、リアルな実態を知ることができるから。

「大黒屋光太夫」

日本史の偉大さは歴史上の偉人からくるものではありません。市井の人の偉大さなのです。あの時代にロシアで言葉も会得した光太夫に感動し、50半ばにして自分もロシア語の勉強を始めました。

7通!

「長英逃亡」

吉村作品に多い「ヒリヒリ感」。当時の役人の優秀さと記録に感心する。

「冷い夏、熱い夏」

1996年父が肺がんで闘病中、繰り返し「冷い夏、熱い夏」を読んだ。吉村先生は50歳の弟隆さんを同病で失うまで病名を隠し通した。同じ思いに溢れるまま書いた手紙に対して忙中での返信は尊く、重厚な悲しみの一冊である。

「天狗争乱」

歴史小説が好きでよく読むが、今までで一番心が動かされた作品だった。

「逃亡」

太平洋戦争末期、国全体が既に監獄も同様という絶望的な状況下で決死の逃亡を続ける主人公の姿が息を飲むほどスリリングで、何度も再読しています。

「幕府軍艦「回天」始末」

新選組が好きで、載っているらしいということで読みました。箱館戦争をこれほどくわしく書いた本はみることがないです。函館旅行のガイドブックにもなりました。

4通!

「破獄」

読み始めは脱獄なんて簡単に出来るのだろつかという疑問、読み進めるうちのハラハラドキドキの「スリル」、最後は人の情けの大切さである「温情」を知り、大変勉強になった。

「光る壁画」

胃カメラの発明が日本人だったとは思わなかった。

4通!

「漂流」

初めて読んだ吉村作品で人間の持つ圧倒的な力と無力さを感じました。

5通!

「ふおん・しいほるとの娘」

あの時代にこんな形で活躍した女性がいたんだと励まされます。

3通!

「冬の鷹」

前野良沢の生き方に感動、吉村さんの思いが存分に現われている。

4通!

「ポーツマス旗」

吉村昭氏文学に入るきっかけになった本です。

「星への旅」

高校生の時、太宰治賞受賞が発表され手にとりました。その後の大活躍の原点のような作品。

「落日の哀」

現在我が国とロシアは大変難しい状況にあります。こういう状況にある今だからこそ一人でも多くの方に幕末にロシアとの外交交渉に多大な功績をあげた人物がいたことを知っていただきたいと思います。

「零式戦闘機」

高校生の頃に読んで当時の日本の技術の高さ、メーカーの葛藤を知ることができた青春です。

企画展のお知らせ 吉村昭の手紙



吉村昭と津村節子が交わした書簡 津村節子氏蔵
二人にとって手紙を送ることは、特別なことではなく、互いに語りかけるように綴った。便箋、葉書のほか、罫半紙やノート、原稿用紙など身の周りにあるものに記している。

- 会期 令和6年3月16日(土)～5月15日(水)
- 開館時間/9:00～20:30 ● 休館日/4月18日(木)
- 入館料/無料 ● 会場/ゆいの森あらかわ 3階 企画展示室

吉村昭(1927～2006)は、徹底した取材と調査を基に、短篇から長篇まで、多岐にわたる題材を掘り下げ、人間の本質と時代の真実を探索しました。妻で作家の津村節子と交わした夥(おびただ)しい数の書簡には、小説家としての揺るぎない志と、家族への深い愛情が綴られています。

本展では、これらの書簡と関連する収蔵資料を中心に、敬愛する作家、ドラマ化作品に出演した俳優、取材・調査を行った人物、編集者に送った手紙を紹介します。“手紙”だからこそ伝えられた言葉の数々から、作品執筆の背景と、吉村の魅力に迫ります。

さらに「吉村昭さんへ…届けたい言葉」と題し、当館朗読会の出演者、また吉村作品の愛読者である皆さまから届いた寄稿と直筆の手紙(一筆箋)も展示します。

特別寄稿「吉村昭さんへ…届けたい言葉」

赤江珠緒氏(フリーアナウンサー)、竹下景子氏(俳優)、津田寛治氏(俳優)、橋爪功氏(俳優)、平松麻氏(画家)、山崎直史氏(TBSテレビ報道局)

詳細はこちら



会員数500人突破!! 「吉村昭記念文学館友の会 会員募集」

友の会会員を募集しています。
限定グッズや各企画展の図録、各種イベントの優先募集のご案内をお送りいたします。ぜひ、ご入会ください!

個人会員(1年)…1,000円 個人会員(3年)…2,500円
法人会員…3,000円 賛助会員…1口2,000円から

毎年好評!
卓上カレンダーを
プレゼント♪



詳しくはHPをチェック!



Vol.22 今号の表紙



画像提供: 長崎歴史文化博物館

企画展「長崎と私」の解説パンフレットでは、長崎の歴史と文化を味わっていただきたく、江戸時代にシーボルトのお抱え絵師として活躍した川原慶賀の作品を表紙に使用しました。

慶賀が描いた「唐蘭館絵巻 蘭館図」(長崎歴史文化博物館蔵)は、10枚の絵図が並ぶ巻き物となっています。その中から「蘭船入港図」(中央)、「蘭船出港図」(左上)を今号の表紙に使用しました。中央緑の帽子の男性がシーボルト。お滝、お稲の親子。遠方を眺めるオランダ人の、丸い望遠鏡の先にはオランダ船・・・をイメージしました。当時の長崎・出島の雰囲気を感じてみてください。

編集後記

☆今号の巻頭では企画展「長崎と私」でも多大なご協力を賜った長崎県立長崎図書館指導主事・長崎国際大学非常勤講師の中島恵美子先生の特別寄稿を掲載しています。津村節子氏との関係や、吉村作品と長崎について、長崎と深いゆかりをお持ちの中島先生だからこそ感じる思いについてお話し下さいました。
☆前号で募集した「私の好きな吉村昭作品」では、作品への一人お一人の溢れる思いをたくさんお送りいただき、誠にありがとうございました。いただいたお声について、一部ではありますがP7に掲載していますので、是非ご一読ください! また3月16日からの企画展でも吉村昭へのメッセージなどを募集しております。引き続き皆さまのご参加をお待ちしております。

吉村昭記念文学館ニュース 万年筆の旅 vol.22

令和6年3月28日発行

- 編集・発行/荒川区 登録番号(05)0080号
- 問合せ/吉村昭記念文学館
〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1ゆいの森あらかわ内
TEL: 03-3891-4349
FAX: 03-3802-4350
URL: <https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/>
【開館時間】9時～20時30分 【入館料】無料
【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

- アクセス
- ・都電荒川線「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 …… 徒歩1分
 - ・東京メトロ千代田線(町屋駅)2番出口、京成線(町屋駅)下車 …… 徒歩8分
 - ・コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
 - ・東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線(大手町駅)→(町屋駅)(乗車13分)



※イベント等の最新スケジュールは当館ホームページからご確認ください。